

## 平成27年度第3回「知事と語ろう市町村ミーティング in 最上町」

＜開催日時＞ 平成27年7月8日（水）

＜開催場所＞ 最上町中央公民館

＜参加者＞ 約200名

### 【開催テーマ】英知の結集によるぬくもりに満ちた元気な地域の創生

#### 【質疑事項】

- 1 旅行券発行事業の継続と瀬見温泉内における環境整備について
- 2 保育士人材の確保について
- 3 最上地域の安心安全、いのちを守る医療の確保について
- 4 若者交流による定住対策の強化について
- 5 地域コミュニティについて
- 6 もみ殻や森林資源を活用した再生可能エネルギーと循環型地域経済の構築について
- 7 アスバラガス生産組合への支援について
- 8 地域の歴史研究の取組みについて

#### 【テーマに関する質疑】

- 1 旅行券発行事業の継続と瀬見温泉内における環境整備について

＜意見者＞

昨年は、山形 DC（山形デスティネーションキャンペーン）開催により全国から多くのお客様をお迎えすることができました。また今年度に入り、国の政策で消費を喚起するために県、町を挙げて旅行券発行事業に取り組んでいただき、本当に感謝しております。しかしながら、まだまだ地方における景気は低迷していると私は感じております。この3年の間に開催してきましたプレ DC、昨年の山形 DC、そして今年度のポスト DC と、大型キャンペーンを展開した成果を確かなものにするためにも、引き続き誘客促進及び消費喚起に関する取り組みが必要不可欠だと思います。つきましては、短期的でなく継続的な観光客誘致を促進するためにも来年度以降も旅行券発行事業の継続をお願いいたします。

次に、「瀬見温泉内における環境整備について」ということで、当温泉街も廃業した旅館の空き家が出てきております。このような状況ではありますけれども、瀬見温泉の若手経営者を中心といたしまして、地域の活性化と温泉街の振興について一丸となって頑張っているところでもあります。

そのような中で、当温泉街の課題として、冬期間の消雪の問題や駐車場の確保などがあります。これらについては今後、町と協議を重ねながら解決できるよう頑張ってまいりたいと思いますので、ぜひ知事からも後押しの御支援をお願いしたく、よろしく願いいた

します。

### <知事>

質問と関係ないかもしれませんが、山形県は県内各地の女将さんたちが協力し合って一丸となってその活動をしているということがとても有名で、全国的にも珍しい例なんです。でも、最近、若旦那が注目されているんですよ。若旦那連盟みたいな感じでね、他県の例でありますけれども、ぜひ本県も、若旦那たちのそういったPR というものやっつけていければ本当にまたまた力が強くなるのかなと思った次第であります。

今年度、県が取り組んでいる「山形日和。」旅行券の発行なんですけれども、これは、県内の観光資源に対する消費の喚起ということで、大変有効なものではないかなと思っています。今後の観光誘客の促進に繋げていきたいと思っています。観光関係事業者の皆様には、魅力ある宿泊プランや旅行プランの御提案をしていただきたい。そして、効果的に事業を活用していただきたいと思っていますところなんです。

この旅行券事業は、政府が平成26年度の補正予算で経済対策として起こしたものであります。「地域活性化 地域住民生活等緊急支援交付金」という名称なんですけれども、これが財源になっているんです。政府の緊急経済対策として臨時的に創設されたものでございますが、内容的には山形県として全体で約15億円なんですけど、そのうちの約9億7千万円を旅行券事業に活用しております。来年度以降につきましては、政府に対して地方創生に向けて活用できる自由度の高い新たな交付金の創設を提案をしているところでございます。全国でこの事業は行われているところなんです。

県としましては、今回の旅行券事業による消費の喚起拡大効果などについて、十分に検証を行って、その上で今後の誘客拡大に繋がるような施策展開をしていきたいと思っております。来年度以降の事業継続という御要望でありますけれども、政府の交付金なものですから、そういった動向も踏まえながら、対応していきたいと思っています。ただ、「観光立県山形」これは成長戦略にきちんと掲げているところでもありますので、魅力ある地域の推進、地域づくりの推進や戦略的な誘客施策の展開など、関係者の知恵を出し合っただけでオール山形で取り組んでいきたいと思っております。

2点目が、倒産して空家になった旅館を解体撤去して共同駐車場にすることに対する支援ということでもあります。

温泉街の環境整備についてですけども、県内で人口減少や高齢化などを背景として空き家がやっぱり増えております。空き家が適切に管理されていませんと、防災面、また景観面でもよくないんですね。地域の皆様が生活する環境に影響を及ぼす、雪で潰れてそれが道路にはみ出したりとか、怪我人が出たりということが考えられますので、地域の住民にも影響を及ぼす、空き家、空地の利活用というのは大変大きな課題だと思っています。

御意見いただきました旅館などの空き建築物を含む空き家の除却ですが、跡地を地域活性化のために使用しなければならないというような要件はありますが、国土交通省の「空

き家再生等推進事業」というものがございますので、それを活用することができると考えております。

また今回のような民間の建築物の場合は、所有者の意向というものが大事で、それを確認する必要があります。最上町さんが除却に対して補助することも必要となりますので、まずは最上町さんを含め、関係者の皆様でよく御相談をいただきたいと思います。県としましても、情報提供や技術的な助言などの支援を行いながら、市町村と協力して空き家対策にあたっていきたいと思っております。

それから、統一された町並みの景観ということでもあります。統一された町並みの景観というのは、町の魅力が増しますし、継続的な観光誘客に繋がると考えられます。良好な景観を作り出すためには、地域の方向性を定めた上で、地域内の一体的な環境整備が必要です。またその保全と活用には、住民の意識向上と合意形成が不可欠でありますので、景観を活かした地域づくりには、住民、企業、行政が連携した長期的な取り組みが必要だと思います。良い例が金山町なのかなと思います。100年後の景観ということで取り組んでおり、何十年もかかる、ということもありますね。ですがそれがやっぱり観光に結びついていきますね。県では、景観を生かした地域づくりを支援するため、景観セミナーの開催による先進事例の紹介や、専門のアドバイザーの派遣を行っているところです。最上町「瀬見温泉地区」がもっともっと素晴らしい景観になっていくためにも、最上町さんと協議しながら支援を進めていきたいと考えているところでございます。ここで、町長さんのお話もいただきたいと思っております。

#### <町長>

今回の旅行券発行事業の県の取組みについて感謝申し上げたいと思います。ぜひ、国のほうにも継続できるように頑張ってくださいと思います。

1点、改めて感じたことは、この旅行券の販売を、直接販売もしたのですが、あっという間に売ってしまったということ、じいちゃんばあちゃんから言われましたよ。いや、もう、我々はインターネットなんてすることできないんだから、そういう特別枠というわけでもないけど。インターネット購買も良いでしょう、直接販売も良いでしょう、ただ高齢者の特別枠っていうんですかね、そういった配慮もあって。本来1万円の旅行券を5千円で買えるんですから、こんな良いチャンスなかったですよ。そんなことも含めて大変、地方創生の補正予算ということも含めてね、画期的な対応であったと思いますので、これについては、ぜひ継続できるような形にしていきたいなと思います。

これも先ほど知事さんから紹介していただきました。今、瀬見の地区町内会が主体となって、瀬見地域の活性化検討委員会という形の中で、将来の瀬見温泉の魅力づくりの在り方を、将来のランドデザインをひとつ描こうという形の中で、町も入って検討させていただきました。それに先ほど知事さんから御紹介していただきました。共同浴場。まあ全国にないくらいの、露天風呂も含めた共同浴場にしようということで、今の事業にな

ります。この予算は9千3百万円くらいの予算で実施するという事です。

そして空き旅館とかも、おっしゃる通りです。ただ、伊藤屋旅館ね、町の所有物であったわけですが、おかげさまで宮城県の方で、最上早生のそば道場、そば打ち名人が来られて、これも最上町でのそばをPRしながら瀬見温泉の魅力づくりに貢献したい方も来てくれて、今改造しております。おっしゃっていただいた、その瀬見温泉の通りの消雪、やっばり雪の問題というのは非常に大事な視点になりますから、これについてはきちっと、このグランドデザインの中で承知をしておりますので、一気に済むということにはいかないにしても。あと電柱の移動なんかもね、提案をいただいたところでもあります。

何よりも瀬見温泉の魅力「弁慶・義経」のこの歴史のゆかりの、地域の方が子ども達も含めて元気過ぎ隊で、子ども達も一緒に頑張っています。旅館に来られたお客さんに、そういったもてなしができる素晴らしい旅館であります。もう1つ付け加えれば、今日の山形新聞に、瀬見小学校を活用した「きまぐれ喫茶室」が載りました。これは町の職員を退職された夫婦がやっているんですね。瀬見小学校でね。あそこの学校の使い方、そしてパッチワークだったり素晴らしい匠の技を持っております。そして、これも瀬見の若い人たちからの提案です。ミニ四駆の提案を1つ、チャレンジ事業の応援の中でさせていただいております。最上町の西口玄関として、ああいう形で頑張っている瀬見温泉。そして瀬見温泉の若い人たちから提案いただいた「合宿プラン」も築かせていただきました。改めて、町内全体で共通した課題として「合宿プラン」なんかも。旅館だけで決まらない、みんながその魅力づくりに、どの位置に立っているんですか。これが、1人ではなくみんなです。やってみようよ、こういう形で繋げていけば素晴らしい。瀬見温泉もちろん赤倉温泉も含めて、元気になってきているのかな。そういう、若旦那っていうことを披露いただきましたから、頑張りましょう。

## 2 保育士人材の確保について

### <意見者>

最上町では、子育て王国を目指して政策を推進していると聞いております。それで、平成27年度から3歳児以上の保育料無償化など、子育て世代の経済的負担をなくす取り組みが始まっております、これはとてもありがたいことだと思っています。

さて、私は「子育て応援団」のボランティアとして活動しておりますので、町内の園児や先生方と関わる機会が何度もありまして、その時に素晴らしいなと思ったことがあります。いろいろな才能や技を持つ地域の人たちとの交流を図りながらの幼児教育活動が展開されていることです。ある園の昨年度の活動を1つ紹介させていただきます。

地域のシニア層の方々から御協力をいただき、園児も一緒になって竹の切り出しをしたそうです。その後、地域の人たちから年長児一人ひとりに竹馬を手作りしてもらい、竹馬の乗り方を教えてもらいました。最初は「竹馬なんか無理」「乗れない」と言っていた園児もいたそうですが、みんなで励まし合い、何度も転びながら練習を積み重ねたそうです。

中には泣きながら自主練習をした子もいたとか。そして発表会当日、保護者や地域の人たちが見守る中、年長児1人ひとりが見事、竹馬乗りを披露できました。三つ子の魂百までのことわざもありますように、人格形成期に地域との繋がり合いの中で共に学び、育つ活動をこのように取り組んでいることは素晴らしいと思います。それと同時に、より良い育ちのためには日常の指導やしつけの積み重ねが大切なことは言うまでもありません。町内5つの園では、先生方が日々指導に励んでおられますが、保育士資格の人材がまだ十分とは言えないことも事実です。ぜひ、知事さんには保育士有資格者の育成の支援をお願いしたいと思います。

### <知事>

市町村、それから関係者の皆様と連携した取り組みを進めた結果、2年連続で今年の4月1日に待機児童ゼロということを実現することができました。ただ、これは調査の上ではゼロになったということでありまして、県内一円ではやっぱり子どもを預かる施設が足りないということが大きな課題だろうと思っております。最上町さんでは、1つの幼保連携型認定子ども園と2つの保育所に、181名の児童が入所していて、うち3歳未満児の入所は27名と伺っております。引き続き、待機児童ゼロを目指して、今年から本格施行された「子ども・子育て支援新制度」を着実に推進してまいります。今後とも「子育てするなら山形県」として、多様な保育ニーズに応じた子育て支援サービスを積極的に展開していきたい。そのために子育てを支える保育人材の確保が一層重要となっていると考えています。

今年度、保育関係団体や保育士の養成機関をメンバーとする「保育士サポートプログラム」の策定会議を設置いたしました。保育士が、安心して働ける支援体制を構築するため、保育人材の育成と確保、就業継続及び再就職支援を内容とする「保育士サポートプログラム」というものを策定することとしております。これまでは、医師確保、ドクターですね、それから看護師についてやりましたけれども、保育士についてもサポートプログラムを作りたいと考えております。サポートプログラムの策定にあたりましては、保育士の育成、地元での就労に関する支援策などに付きましてもしっかりと検討してまいります。

なお、サポートプログラムの策定に先立ちまして、私も参加したんですけれども、保育士としてのキャリアアップを図るための第一歩として東北では初めて新任保育士の合同入職式を6月19日に開催しました。県内全域から経験2年未満の保育士の方々に全員ではないんですけれども、希望者の方々に集まってもらって、そこで合同入職式を行いました。皆さんが日頃感じていることや、保育士の魅力、今後の目標など大いに語り合ってもらったところがございます。そうやって、保育士同士の横の繋がりを強めていくことでモチベーションが向上していく。そして人材の定着、離職防止に繋がっていくようにしたいと思っております。

また、「子ども・子育て支援新制度」の施行によりまして、様々な子育て支援分野で人材の確保が必要となります。この度、その担い手として、子育てなど多様な経験を有し、子

育て支援の仕事に関心を持つ方々を主な対象とした「子育て支援員」研修を実施して、一定の研修を修了した方は「子育て支援員」として認定する制度が、今年度から始まります。制度開始の本年度は、9月以降に山形市での開催を予定しております。ぜひ、多数の皆様から研修を受けていただきたいと思います。なお、今年度の参加状況などを踏まえて、来年度の研修会場などについても検討していきたいと思っております。今年度は山形市1カ所での開催になります。

更に、経験豊かな中高年層の方々に子育て支援員になっていただき、子育て支援の分野で活躍していただくことが山形県の特徴を活かすことに繋がると思っております。今年度、県では中高年層による地域子育て支援モデル事業を実施し、既存の子育て支援制度では対応できない子育てニーズに対応していきたいと考えております。

具体例を挙げますと、空き店舗などを活用して子どもが集まる、集う場所を整備して、仕事をリタイアした方など、経験豊かな中高年層の方々から学習や遊びの指導をしていただくようなことを想定しております。これは山形県独自の事業であります。地域の実情に応じて柔軟な対応が可能な補助事業となっております。御検討中の事業がありましたら、県の担当課にぜひ、御相談いただきたいと思います。今後とも、子育て環境の充実にしっかりと取り組んでいきたいと思っております。

### **3 最上地域の安心安全、いのちを守る医療の確保について**

#### **<意見者>**

「県立新庄病院の改築に向けた検討」につきまして、3点程お願いしたいことがあります。

最上町は、新庄から遠く離れておりまして、宮城県県境からの集落からでは車でも県立新庄病院まで40分から50分以上、冬期間は1時間以上を要します。町内には、最上町立病院と個人の開業医の1カ所ありますが、手術が必要な病気や専門的な治療が必要な病気、出産に関しては県立新庄病院はなくてはならない存在です。そんな中で、長年の最上地域の悲願でありました、県立新庄病院の改築検討が前進していると聞いており、大変嬉しく思っている1人です。さてその際に、ぜひ検討をお願いしたい点についてこれから述べさせていただきます。

1点目が、最上町も含めて、車を持たない高齢者がこれからますます増えると思っておりますので、その高齢者も多く通院することから、立地条件で各町村からの交通の利便性、駅から遠く離れてもシャトルバスの運行なども含め、広く検討を期待いたします。

2番目に、現在県立病院と離れているのでドクターヘリの発着場所は豪雪期であっても県立新庄病院の直接敷地内で利用できることや、車いすの障がい者や、子どもを抱えたお母さん方、せいぜいやっと歩行する高齢者などが、豪雪の中でも安心して利用できる専用の地下駐車場など、特に最上地域が県内でも有数の豪雪地域であることを考慮に入れた検討を期待しております。

3番目は、現在も地域内の病院との連携が行われていると思いますが、特に最上地域は今後も高齢者が増加しますが、県内の他の地域に比べても医療や福祉資源が多くはない状況です。今後も各自治体の病院や、医院、福祉施設など医療と介護、福祉の連携、また、医師や看護師などの専門スタッフの連携についても県立新庄病院の果たす役割は非常に大きくなっていると思われます。相談内容も多岐にわたることから、医療相談員等の増員や資質の充実についても大きく期待するものです。

以上、3点なのですが、実は7月5日の日の山形新聞のインタビューの記事に、この7月に6代目の県立新庄病院の院長に就任された八戸新院長の抱負や課題が載っております。抱負として、「県立新庄病院の理念は『仁・愛・和の心』で、歴代院長がされてきたと。私も引き継ぎ基幹病院として地域に信頼され、安心を与える医療を提供することを使命としたい。」と述べられております。改築と機能強化については検討委員会で検討されることとした上で、運営機関の盤石化が重要としており、地域内完結型の医療の充実を図るべきとしております。その新院長の抱負も踏まえて、よろしく願いいたします。

#### <知事>

新庄病院というのは、最上地域の基幹病院でありますし、最上地方の皆さんが安心して生活していくためになくてはならない重要な病院であると認識しております。これまでたくさんの方から署名をいただいたり、何回も御要望をいただいたりしてまいりまして、ようやく見える形で進むことができるようになったといいますか、したといいますか、今年度、「山形県立新庄病院 改築整備検討委員会」を設置いたしまして、新しい県立新庄病院の果たすべき役割や医療機能などについて検討することとしております。何回かそういう検討委員会が開かれると思います。今、御要望いただいたそういった点をしっかり検討していくものと思っております。

交通手段がどうなるのか、あるいは、豪雪地域ということをどういうふうにしてカバーしていくのかとか、そういったことなどを十分にこの検討委員会の中で議論されていくものと思っております。今日の御意見を参考にさせていただきお伝えしたいと思いますが、本当に最上の皆さんが待ちに待った改築、ほとんど新築だと思いますけども、新庄病院の新しい「新生県立新庄病院」が誕生するということになります。皆さん方からも、いろいろな御提案をいただきながら、しっかりとそれを踏まえ、予算もあるわけでありませけれども、できる限り良い病院を作っていきたい、最上の皆さんの福祉と医療の連携というものを含めて、しっかり考えていければと思っておりますのでございます。

## 4 若者交流による定住対策の強化について

#### <意見者>

地元に戻る気持ちがある若者も多くいると聞いております。実際、私の友人でも多くおります。その中には、収入が下がっても条件をクリアすれば地元に戻ってきたい、そして

働きたい、移住したいという人もいます。地元で若者が戻りたいと思うきっかけとなるポイントを把握し、Uターン者や単身移住者が地方の、例えば最上町であるとかに住みやすくなる支援策、都市部で学んだことや自分のスキルを活かせる交流の場、正規雇用の拡大についてお願いしたいと考えております。

### <知事>

Uターンや移住に関心のある方からの御相談の多くは、暮らしぶりや住まい、また仕事に関することでございます。一方で、多くの移住実践者、実際移住した方からは、自分を受け入れてくれる、安心感のあるコミュニティの存在や、人との出会いや繋がりが移住を後押しするきっかけになったとお聞きをしております。このようなことを踏まえまして、暮らしぶりや住まいなどの移住の相談と県内就職に関する相談を一体的に行うことが大事だと思います。県では今年4月に、首都圏における移住交流の新たな拠点として「やまがたハッピーライフ情報センター」というものを東京の有楽町に開設したところでございます。また、移住実践者などの生の声をお伝えするという観点から、このセンターで、移住セミナーなどを開催して、先輩移住者から山形の地域での暮らしぶりや人との繋がりについて、生の声を伝えるとともに、地域での暮らしなどを知ることができる体験ツアーなどを企画して、実際に参加していただくということをやってもらって、地域や先輩移住者との関わり、地域の良さを実感して感じていただけるように努めてまいります。

更に、住まいの確保ということは重要です。県では県内2つの不動産業団体との連携によりまして、移住希望者が求める物件情報を幅広く提供できる仕組みを構築しております。その他、移住に伴って住宅のリフォームを行う場合には移住者向けにより有利な助成も行うこととしております。バリアフリーですとかいろいろな補助があるんですけども、移住ということでも、より有利な助成を行うことにしております。

このような取り組みを進めるとともに、移住や定住の対策は何よりも生活の場となる地域や市町村の積極的な取り組みが重要であります。県としましては、市町村における安心感のあるコミュニティづくりなど、移住者を受け入れやすい体制づくりを支援してまいります。

それから、都市部で学んだことや自分のスキルを活かせる交流の場というものも大事だと思っております。県では、若者グループの活躍、活動を創出し、繋がる機会を拡大したいと思っております。若者グループの交流サイト「やまがたおこしあいネット」を運用しており、県内の若者グループのネットワーク化に取り組んでいるところであります。具体的には、交流サイト上での若者グループ同士の情報提供、相互交流を図るとともに、地域活性化に向けた協働のアイデア作りを行う交流会を実施いたします。若者グループのレベルアップのための講座も開催しております。若者同士が顔の見える形で交流を促進できるように進めてまいります。

現在最上地域では30団体、県全体では250団体が登録をしております。今後も交流サイ



トを活用して、積極的に他の団体と交流を促進していただきたいと思います。

こうした取り組みによりまして、地域の担い手として地域活動に取り組む若者を育成・支援し、能力・スキルを活かす機会を創出してまいります。また、若者同士のネットワーク化、交流促進も図ってまいります。

それから正規雇用の拡大、これの主な取り組みとしましては、現在若い人の仕事や生活についてのワンストップ相談窓口「トータル・ジョブサポート」がございます。これを県内4地域に設置して、就職相談などの支援を行っております。最上地域ではハローワーク新庄の中に設置しております。また県内企業の認知度を高め、就職を促すための取り組みとしまして県内の企業の求人情報の他、企業の魅力などについても合わせて紹介するホームページを今年の秋の稼働を目指して準備をしているところです。県外在住の求職者が県内企業の就職面接を受ける場合の経済負担を緩和するため、1回あたり1万円を上限として交通費を一部助成します。そういった取り組みも、今年度から始めたところであります。

更に、若者の働く場を作る取り組みとしまして、政府による企業の本社機能の移転、拡充にかかる法人税の税額控除の措置があるのですが、県としましても若者や女性が志向する分野の雇用を確保をするため、県内からの本社機能移転に対する補助制度の創設をしております。また若者や女性、UIターンで山形に戻られた方々が創業する場合の支援もいたします。オール山形での様々な取り組みを行っていききたいと思います。

この他、政府や県の正規雇用の拡大のための助成金事業などの支援制度がありますので、これらの周知を図りながら積極的な活用を促してまいりたいと思います。多くの若い人たちが山形に帰って安心して仕事に就くことができ、頑張っていただけるように、山形創生の実現に向けた検討を進めていききたいと思います。県と関係団体、市町村、医師会と連携しながら正規雇用の拡大に向けた取り組みを推進していききたいと思います。

多くの自治体が、地方創生ということで移住対策に力を入れております。山形県というのは本当に素晴らしいところがたくさんあるんですが、「何もない」とみんなが言うてしまうと若者もどンドン出て行ってしまいうんですね。そうではないです。この素晴らしい豊かな自然ですとか、おいしい食べ物、何よりもその地域社会、若い頃はちょっとうるさいと思うところもあるかもしれないですが、困ったときには支え合うというような、特に子育てや介護の時には、本当に助け合うとか、様々な温かい絆があるわけです。地方に住むことの素晴らしさ、質的な豊かさ、お金ではもう換算できない。御発言の中に、ちょっと収入が下がっても戻ってきたいという人がいらっしゃるといのは、私はそういうことだろうと思います。地元への愛情、愛着、そしてお金では測れないようなとても良いものがあるからだと思っています。また地域に対する愛情を育てていくということも大事だと思っていますし、皆さんからもっともっと、この地域の良さというものを伝えていただきたいなと思います。経済対策第一でありますので、これからもやっていきますけど、そういった精神面の対策と合わせて、この両面でやっていかないと地域創生っていうのはな

なかなか難しいと私は思っていますので、今後とも、「ここは良いところなんだよ」って良いところをもっともっと認識、再発見、また新しく作るとか、そういうことをみんなで一生懸命取り組みながら若い人方も定着できるように、戻ってこられるようにしていきたいなと思っていますところでございます。

## 5 地域コミュニティについて

### <意見者>

さて、私のお願いは、この地域コミュニティについて一步でも前に進むためにはどうしたら良いかと。私も長いこと、学校関係や消防、それから商工会、それからお祭りなどでいろんなことを半世紀近くやらせていただきました。こうした経験の中で、行政が前に出たり、あるいは先導するような手法というのは、なかなかうまく行きません。今から30年ぐらい前に最上中学を作るときに、この経験を嫌というほどさせられました。何をするかというと、私の町の町長は国に先立って千日も前から地方創生ということを実践しておられます。各集落に、財政的支援をくまなくし、今年で3年目になります。しかし、その交付金を出してもらったまではいいんですけども、それを集落で何に使うか、どうするか、その相談する相手がいなかったり、私らみたいな高齢者だけだったりするもんだから、なかなか、前の発言者が言われましたように、若い人たちの考えが考慮される場が少ないと、それで、これからの集落をできるだけ大勢集まれるように、ある程度集落のサイクルも考えながら、みんなで地域をどうするかということで、みんなが元気であれば、町も県も元気になるんで、その辺から第一歩入っていききたいなと思って、これから、いろいろ我が町の町長を先頭に地域の区長さん方とも協力し合いながら、良い集落、住んでみたい集落と言えるように若い人たちからも入ってもらって、意見を聴取していききたいなと思います。そのために、ぜひ県のほうにお願いしたいのは1つだけ。支庁単位ぐらいで、同じ郡内の同じような悩みを抱えている集落の役員がいっぱいいると思うんです。今、自主防災なんかだと年に2回くらい支庁、最上郡の総合支庁でやります。それからお祭り関係も警察関係で郡内の役員を集めてあります。また集落の役員というと、むこうにもそういう悩みを語り合う場がございませんので、ぜひ支庁舎単位で、その郡内最上郡だったら1市7町村を集めて、いろんな悩みを持っていると思うんです。それを語り合う場を作っていただきたい。

### <知事>

本当に地域コミュニティ、地域社会、すごく大事なところだと思っています。世界的に見れば、日本のこの仕組みっていうのは私は誇りうるものだろうと思っていますところ。昨日、アメリカから来た若者が3年いて、帰っていくときの挨拶に来たんです。そのときに、「アメリカでは隣組とか町内会とかあるか？」と聞いたところ、その人はボストンから来たんですけども、「無い」と言っていました。やっぱり、いろんな制度がありますけれ

ども、こういった仕組み、調停員という仕組みなんかもそうなんですけれども、日本は独自の仕組みを持っておりまして、世界に誇りうる国だなあと思っているところでもあります。その地域コミュニティというのが、人口減少や少子高齢化ということで、防災活動でしたり、またいろんなお祭りといったことがなかなか立ち行かなくなるような、深刻な影響がどんどん出てきているのかなと考えております。

地域の活力が弱まらないようにというようなことで、県では地域づくりのアドバイザーを派遣するなどの支援もしているところがございます。ただ、お話を直にお伺いして思ったんですけれども、最上郡内で集落のリーダーの人たち、その立場にある人たちがやっぱりいろんな課題を抱えていて、もちろん、町長さんとかいろんな方とは話はされているかと思いますが、最上一円の方々が一堂に会してといいますか、またいろんなことを話し合える場があればいいなというお話だったと思いますので、そういうことは私は可能かと思えます。丁度、今すぐどうのこうのとはまだあれですけれども、最上総合支庁長が来ておりまして、しかも最上郡で生まれ育った、最上郡生まれの最上郡育ちの支庁長でございますので、そのことに対してどうですか？

#### <最上総合支庁長>

まずもって最上町は、地域コミュニティ関係については町長さんを中心にかなり最上郡内の中でもうまく行っている町ではないかなと思っております。決してお世辞ではなくて、一つひとつの取組みが、メリハリが効いていて、常に町長さんの姿勢というのが感じられるように、地域地域の実勢にずっと問いかけていくという手法をとってられるということで、これは私どもも非常に参考にさせていただいているところです。県内の様々な「良いな」と思われる事例は多数あるのですが、全て地域の人や地域の人たちが考えていくという姿勢がある地域ほど、活力があつていろんな世代の方がいきいきと活躍なさっているという事例が多いんだろうと思います。仮に、もしこれからが足りないとするれば、やはりこう、何かうまくいく事例を一つでも多く手掛けていくということで、それはあまり高望みしないでやっていけば、もっともっと各年代とも楽しみが増えてくるのかなと思います。今、お話がありましたように、これから市町村の方とお話をさせていただきながら、研修会とか意見交換会的なものを、最上地域全体でやれないかどうかにつきまして持ち帰って、できれば前向きな方向で検討を進めていければと思っております。

#### <知事>

期待して待っていきましょうね。山形県は4つの地域に分かれておりまして、それぞれのところに代官を置いているわけですね。代官というのはちょっと古い言葉ですけども、総合支庁長ということになります。やはり、その郡内を、隈なくこう、私の代理というような形でしっかりとやってもらっていますので、そういった集まりを持てるようになると良いなあと今思ったところでございます。

それから、政府のいろんな施策もあって地域起こし協力隊というのがありますけれども、山形県は、昨年度は活動した隊員数が東北で第1位、全国でも第7位と、中央の事業も活用している県であります。そういったことを大いに活用していくことが大事かなと思っております。

その件については前向きに検討させていただくようなことでよろしく願いいたします。

## **6 もみ殻や森林資源を活用した再生可能エネルギーと循環型地域経済の構築について**

### **<意見者>**

今般、米価が値下がりする中、後継者問題、あるいは耕作放棄地など、農業を取り巻く環境なんかは年々厳しさを増しているかと思われま。そんな中で、当社のほうも、作業受託のほうをお願いしたいということで、受託なんかも増えておりまして、その中から出てくるもみ殻を利用した固形燃料の製造を行っております。

最上町では、町立最上病院などの公共施設において、間伐材を利用したバイオマスボイラーによる地域熱供給を行っております。また今後、整備される「若者定住環境モデルタウン」においても、これらのバイオマス燃料による地域熱供給を整備予定と聞いておりますけれども、積極的に再生可能エネルギーの利用と循環型地域経済の構築に力を入れておりますが、知事さんが言っている豊かな森林資源を有効に活用し、地域の活性化に活かす「やまがた森林（モリ）ノミクス」を知事さんが推進しておりますが、この森林資源やもみ殻などを利用した、活用した再生可能エネルギーと、循環型地域経済の構築について知事さんの御所見を聞きたいなと思います。よろしく願いします。

### **<知事>**

私の基本的な考え方ですけれども、山形県は県土の約7割が森林でできております。この森林があるからこそ、きれいな空気、おいしい水が育まれて、それが川となって田畑を潤して、おいしいものができるので、やはり森林は、森は大事だなと思っております。森のエネルギー、森の恵み、そして豊かな森林資源を活かして、経済を活性化する、林業を振興する、そして雇用創出に繋げていくということで「やまがた森林（モリ）ノミクス」を宣言しているところであります。山形県と35市町村長全員で「やまがた里山サミット」を立ち上げて、「やまがた森林（モリ）ノミクス宣言」を行ったところでもございました。最上町の高橋町長さんも中心的な存在となっていただいているところであります。

林業ということで、山ということになるんですけど、今まで育てる林業だったかと思えますが、使う林業に軸足を移さなければいけない状況であります。戦後育てた森、木が大きくなってしまっ、もうこのまま使われないとどんどん荒廃していくことになってきますので、しっかりと、木の良いところは建築材料として使い、また間伐や廃材というものはそれなりの使い方をするとということで、余すところなくしっかりと活用していく。そのことで、地域経済が活性化する、林業振興、雇用の創出に繋がっていくという緑の循環になっ

ていくと思っております。本当に最上町さんはそういう点で先進地だと思っております。町立病院、老人集合住宅、保健施設などで木質チップを活用しておられます。どんどんこれを進めていただきたいと思っております。もみ殻を活用するというのも、大変よい取組みではないかと思っております。

私が現場を見たのは小国町です。小国町さんでモミガライトを作っておりました。もみ殻で固形燃料を作って、それを熱利用することで、確か、その近くのイチゴ栽培、ハウスの中でイチゴ栽培にも使っていたかな。本当に農業、生産にまで、やっぱりしっかりと使えるといいますか、いろんなことができるんだと思うんですね。様々な活用を考えていただければと思っております。

東日本大震災の時に原発事故が起こり、また、県内で大規模停電が2回起きました。そのときに私は、原発に関しては卒原発を提唱しました。県内で大規模停電が2回起き、知事として、集中拠点方式による既存の電力システムはよくないと思ひまして、地域の資源を活かしたエネルギーというものをどんどん開発していかなきゃと思った次第です。

それで、山形県エネルギー戦略というものを、大震災の次の年、平成24年の3月に策定しました。新たなエネルギー資源を今後20年間で100万キロワット、これは原発1基分に相当するんですけども、それを開発するというところで民間事業所を含め再生可能エネルギーの導入拡大することを県内で進めているところでございます。そういう戦略を掲げておりますので、しっかりと取り組んでいきたいと思っております。

県内には風、また水、太陽光、何よりも木があります。山の木があります。それをもっとも活用していくことが、私は大事だと思っております。その後継者育成ということでも、県立農業短期大学校に林業学科というものを設置するわけでありまして、しっかりと力を入れて取り組んでいきたいと思っておりますので、再生可能エネルギー、このことについては現場の皆さんと一体となって、山形県の森林を活性化していきたいと思っております。一部の山では手入れもなっていない状態なんですね。話が飛んですみませんが、鶴岡の山五十川で土砂崩れが起きて、現場を見に行きましたら、道路の端が土砂崩れしていて、何十本という杉が崩れているんです。そこは不在地主のところでありました。手入れしていないのです。というのはお金をかけて手入れをしてもらえない、さっぱり儲からないからという、簡単に言えばそうなんですね。でも、やっぱり山は宝だと、私は思っておりますので、その何十年も経った木も宝だと思います。それが活用できるようにしなきゃいけない。林道を整備して、しっかりとそれを伐採して、搬出して、それを建築に使い、また熱利用に使い、林業振興ということで取り組んでいきたい。町の協力も大切です。ペレットストーブとかね、ペレットボイラー、そういうものを町の人たちに使っていただいて、消費をしてもらうことで、循環ができるわけでありまして、35市町村と県が一体となってこれは進めていきたいと思っております。今後ともしっかりと、再生可能エネルギーの利活用の推進に取り組んでいきたいというふうに思っております。

## 【その他の質疑】

### 7 アスパラガス生産組合への支援について

#### <意見者>

アスパラガス生産組合の会長をさせていただいています。平成 16 年から 12 年、一回りというような感じではありますけれども、一昨年は 3 億 8 千万円、今年については 2 億円を突破し、4 億円を超えるような勢いの中で生産をやっております。それもひとえにやっぱり県の金銭的なリード、そしてソフト関係の人的アドバイスのおかげで、本当に短時間の中で成長することができました。メンバーは 119 名、来年度入るという人も数名いらっしゃるということで本当に利益のある農業になってきたのかなと、補助金をもらいながらですけども、自分を含めてかなり多くの方が消費税及び所得税を払えるような農家になってきた。補助金をもらったおかげで、そのお返しに消費税や所得税を払っているというような感じで思っております。

まだまだ、生産の力はまだ未熟ですけども、それを出荷して、出荷してというか農協さんのほうに出しているわけですけども、その箱枠が小さくなり、今年は一日の量で 7 トンぐらいの出荷量があり、農協、また町を挙げてまた補助対象になるような格好の中で箱枠を増やしていただき、来年、再来年には 5 億円を目指し、更には、あと 50 人ぐらい増えますと 10 億円を目指せる産業かなと、自分はそんなふうに思っていますので、今後とも農業技術普及課の先生方、今年、なんか少ないということで、メンバーが増えたにも関わらず、それに毎月一回現地指導とありますけども、その時間が取れないということで、なかなか生産者が 10 年選手から 1 年生までいる生産者なんで、手厚いアドバイスをひとつお願いして、御礼とさせていただきたいと思います。

#### <知事>

とても力強い言葉をいただいたなと思っております。本当に町を挙げて取り組んでいただいていると認識をしております。生産者の方、農業関係機関の方、本当に御苦労さまでございます。

5 億円目指し、10 億円にもできるという本当に素晴らしい話であります。トップランナーももちろん育成できると思いますし、先行投資というのは本当に大事でありますので、県民の皆さんの御理解をいただきながらしっかり支援をしていきたいと思っておりますし、これからはどんどん取り組んでいただければと思います。

また販売ということも大変大事でありますので、生産と販売、両面あってこそでありますので、大消費地との協定とかがこれからの課題だろうなと思っております。作りすぎてやっぱり売れなかった、というようなことでは困るわけありますので、そのところをきっちりやっていくことで、どんどん私は伸ばしていけるかなと思っております。県としても、できる限りのことをさせていただきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしく願います。

## 8 地域の歴史研究の取組みについて

### <意見者>

私たちは、歴史研究会を立ち上げました。昨年10月であります。地方活性化に狙いを持っております。つまり、40年前ぐらいから地方の時代、あるいは一村一品。そういう活動をしてきたわけですね。今はその条件が全く違うんですね。町がなくなるんですよ。集落がなくなるんですよ。つまり、少子高齢、これほど厳しく迫っている時代はないんです。そんな中で、どのように私たち町民がこの町を集落を守るかということで立ち上げた会があります。つまり、それには町の歴史から学ぼうということでした。この私たちの町を先人がどのように、このコミュニケーションをとりながら、その時その時代の人が、この厳しい自然の中で、この町づくりをしてきたか、人間が生きてきたかということ学び取ろうということで始めた歴史の会でした。この町に誇れる歴史的な誇れるもの、そういうものを整理してみようと始めたわけですが、今、25名の会員がおります。瀬見から堺田までたくさんの方がいて勉強会を開いていますが、そういう中で町に定住する人、町づくりに頑張る人を育てていきたいと思っているので、その辺のことについて知事さんの率直な感想意見を聞きたいと思っております。

### <知事>

本当に歴史に学ぶことはとても大事なことだと思っています。温故知新そのものだと思いますけれども、それを実践しておられることで本当に敬意を表したいと思っています。大変な時期というのは必ず、これまで何百年、何千年の間に何回もあったと思っておりますけれども、そのときどうやってやっぱり乗り越えてきたかということだと思いますので、私からは、解決策というようなことは、なかなかないんですけれども、やっぱりいかに先人の方がどんな知恵を出して乗り切ってきたか。そういったことをやってくださったからこそ、今があるのでありますので、これは大震災の時に私は実感したことであります。千年前にも起きた、その時にどういうことをやったか、ということなのであります。やっぱりみんなが助け合って支え合って広域連携してやってきた、ということがあろうかと思っております。何よりもそこに住んでいる人が、絶望して終わらないで、やっぱり希望を持って前を向いて私はやっぱり歩んできたというのが大事だったと思います。「ピンチはチャンス」というような言葉はよく言われますけれども、「危機」、危ない、上の字が「危ない」、下の字が「機会」、まあ、チャンスですね。「危機」というときは必ずチャンスもあるというわけでありますから、決してここでめげないで、やっぱり希望を持って将来の世代のために全力を出して取り組むというこの姿勢が一番大事なのではないかと私は思っておりますので、取組みに大いに期待したいと思います。

以上